

---

# 双子の二人「ゼロ」

レイン氷花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

双子の二人「ゼロ」

### 【Nコード】

N3895D

### 【作者名】

レイン氷花

### 【あらすじ】

双子の紅<sup>こう</sup>は、貧血<sup>アオ</sup>持ちの天才。蒼<sup>アオ</sup>は運動神経抜群の妹思い。この二人が揃えば最強！？な、日常？短編「双子の二人」の自己紹介的なシナリオ。

**（前書き）**

3 作？ 4 作目になるこの作品はあんまり楽しくないと思いますが、  
みてくれれば、大体の意味は分かるはず？ だよー？

「お兄ーちゃん！」

この家の次女、中学三年生のブラコン少女黒花桃は急いでいるのか、息を切らしながら兄を呼ぶ。

「うんゝ？どうした桃？」

居間から顔を出して尋ねるは、この家の大黒柱、竜栄であり、家の中で一番下の位置にいる可哀相な人だ。

「お父さんには用が無いから視界から消えろ。」

「ひどっ！何で最近冷たいのゝ？」

「ウザいから。」

桃は、かなり冷たい視線を向けながら言った。

「おゝい、どしたのゝ？」

「あ！お姉ちゃん。」

階段から突然出現したのは、桃の姉であり、長男紅と双子の蒼だ。

「お兄ちゃん起きてる？」

「うん？起きてるよ？」

「ありがと、お姉ちゃん。」

慌てて桃を掴む。

「紅は今貧血で休んでるよ。」

「え、そうなの。」

「用があるなら聞いとくよ？」

何か言つのを迷っているな。

「なるほど、僕じゃ駄目か。」

「あつ、いやそうじゃなくて、ね？」

「分かってるよ？」

紅に言いたい気持ちは分かるから。」

「ごめんなさい…。」

「お父さんには謝りはしないのに蒼には謝るの？」

「ウザイ黙れ。」

「あははっ！」

「ところで、お兄ちゃんはまた貧血で寝てるんだ。」

落ち込んでいる父親を無視して言う。

「うん、僕の裸を意識しちゃってね。」

「それが原因か。」

「そうだよ？鼻血を盛大にぶっかけてね。」

「いや、それはお姉ちゃんがいけないんじゃない？」

「えゝ？いつも裸で添寝してるのに。」

「いやだから、発情期のお兄ちゃんにとっては刺激が強過ぎるよ！？」

「あらあら、紅ちゃんは発情期なの？」

桃と蒼の顔が引きつる。

「じゃあ、今年のプレゼントは何か、大人な本にしましょうか？」

でたよ。

この家で一番危険な思想を持つ人が。

「うふふ 紅ちゃんもそんな歳なのね。」

お母さん！！

「うふふふふ」

微笑みながら近付いてくるのは、この家一番の危険人物で、夫ラブで紅に対して過保護な母親、愛花です。

「うふ どんなのが好きなのかなー？紅ちゃんは。」

メツチャこっちを見てる！

これは僕達に意見を求めているのか！？

「えーと、妹ものと、スク水とかだと思うよ。」

「そう？じゃあ桃か蒼にコスプレさせて二人だけにしましょうか。」

「ストロップ！」

「妹を襲わせる気ですか！？」

「いえ？違いますよ？ちゃんと

「食べても良いよ？」って言うてから二人にするんですよ？」

「あんたは鬼か。」

「あなたは実の娘を娼婦にする気か！」

「ママ、それはしすぎだよ。」

父め、復活したか。

「あらそう？大人になる為に必要かと思っただけだ。」

「まだ早過ぎるよ。」

それよりもアッチで大人になろうよ。」

「あらあら、甘えんぼさんね。」

いらっしやい、二人で大人になってこようね。」

母と父は居間に入って扉を閉めた。

「朝から良くやるわね。」

「ふん、仲が良すぎね、あの二人は。」

「桃も紅とあになりたい？」

「な、な、お姉ちゃん！？何て事聞くの！」

ドタドタドタツバタン！

「うふふ 素直じゃないなあ。」

後ろを振り向いて、微笑む。

「ねえ？紅。」

そこにいたのは、この家の長男紅だった。

「本人抜いて凄い事話してたな。」



「感想は？」

溜息を吐きながら、答える。

「止めて欲しい。」

「同感だね。」

「じゃあ、止めれよ。」

蒼はクスクス笑い、紅の首に両腕を回す。

「おはよう、紅。」

「おはよう、蒼。」

蒼は紅に口付けをし、紅は抱き締めて途中で離れないようにする。  
「…っ…はあ…あ…っ！」

それは二人の関係が、双子同士からかけ離れた物という事を物語っていた。

もうこれぐらいでいいか。

「もう、終わるの？」

残念そうに言葉を紡ぐ。

「ああ、また明日だ。」

「うん、分かったよ。」

「明日から学校だ。」

「そうだね。」

「ところで、朝飯は？」

「あ…。」

「母…無理か、桃は…桃も駄目か。」

「私が作る？」

「いい、遠慮しておく。」

「そか。」

「口調変わってるぞ。」

「ありゃ。」

「あはははは！」

「ククククク！」

こうして一日は始まる。

そして、何かが始まった。

（後書き）

どうですか？感想を書いてくれば嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3895d/>

---

双子の二人「ゼロ」

2010年12月22日06時49分発行